世界市場恐慌論

唐渡興宣

世界市場恐慌論

唐渡 興宣 著

新 評 論

著者紹介

唐渡（からと） 興宣（おきのり）

1943年　香川県高松市に生まれる.
1970年　一橋大学経済学部卒業.
1975年　一橋大学大学院経済研究科博士課程修了.
現　在　北海道大学経済学部助教授
現住所　札幌市西区八軒 95 公務員宿舎 617—36

世界市場恐慌論　（検印廃止）

1979年 6 月15日　初版第 1 刷発行　定価 3,000円

著者　唐渡興宣
発行者　二瓶一郎

発行所　株式会社　新評論

〒160　東京都新宿区西早稲田 3—16—28
電話東京（202）7391番
振替　東京 6-113487番

落丁・乱丁本はお取替えします
印刷　興英文化社
製本　河上製本所

© 1979　唐渡興宣

3033—330143—3177
Printed in Japan

はじめに

私が恐慌論研究を志したのは，丁度，昭和40年不況の時であり，中小企業の倒産の激増，山陽特殊鋼，山一証券の破産と，今日の不況と少しも変らない事態が展開しており，恐慌，不況に理論的，実践的な関心を寄せていた時であった．丁度，大学三年になって，恐慌論研究を進めておられた種瀬茂教授のゼミナールを選んだのもそのためであった．種瀬教授から，何をテーマに勉強するつもりかと質問され，すかさず恐慌論であると答え，読んだ文献として，久留間鮫造教授の『恐慌論研究』（大月書店）があると答えた．そのおかげでゼミの末席に加わることを許可された．それ以来，恐慌論と格闘してきたが，その出発点であり，また目標であるのが，久留間教授のこの『恐慌論研究』であった．この本との出会いは衝撃的であり，眼の前の霧の晴れる思いをしたことは，今も私の脳裏に焼きついている．

久留間教授はその冒頭の論文において強調される．恐慌は近代資本主義に固有な諸矛盾の総合的爆発である．したがって，恐慌論は単に経済的恐慌のみを対象とする理論をさすわけではない．近代資本主義の固有の矛盾の爆発としての帝国主義戦争の必然性に関する研究も，その中に含まれる．教授のこの指摘は昭和4年9月になされたものである．この時点において教授は次の如く提起された．

第一次世界大戦はひとまず段落をつげ，その結果，世界的革命運動の高波はいまや退潮期にある．現在の任務は何か．やがて来るべき新たな危機に対する準備でなければならない．この新たな危機は，おそらく再び世界戦争の形で与えられるであろうが，それを待たないで恐慌の形で来るかもしれない．いずれにせよ，迫り来る一大危機に対する準備こそ，現時の最大の任務である．

当時，世界資本主義は1920年代の繁栄を謳歌し，資本主義の黄金時代の到来に祝杯をあげていた．その時に，恐慌を予想し，第二次大戦を予想し，この来るべき危機に備えることを提起された．何よりも新たな危機の到来の必然性とともに，それに至る道程上の一点としての現在の位置を明確にしなければならぬ．そしてこの確認の理論的基礎はただ，資本主義のあらゆる矛盾の有機的関連とその発展を把握し，その矛盾が最後の爆発をとげるに至るまでの，必然的

発展の過程が解明されることによってのみ与えられる，として恐慌論の歴史的任務を明らかにされた．

今日は，世界戦争という一大危機の諸条件は喪失している．だが，現時の不況は日々深刻化し，インフレーションは高進し，失業の加速度は依然として持続している．資本主義は今や明らかにその歴史の夕暮にさしかかっている．今や，久留間教授にかわって，次の如く主張しなければならない．現時のこの深刻な事態はいかなる歴史の道程上の位置にあるかを明確にせねばならぬと．今日の深刻な事態を解明するには，現実の提起する問題に巨大な歴史感覚を持って接近するという思想態度，素材を細部にわたって分析し，我が物とする強靱な理性的探求心を必要とすることを，同書は今もって私に衝撃的に語りかけ，遅々たる私の研究の導きの糸をなしてきた．

今，ようやくその成果を発表できる段階に達した．本書の完成の過程は同時に私自身が若手研究者として成長して来る過程であった．その過程は極めて多くの人々によって媒介されている．とりわけ，学部，大学院時代を一貫して指導して下さった種瀬茂教授の学恩には返し切れぬものがある．種瀬教授は私の暴走的，一面的な思考をいつもチェックされ，その中の積極的な側面をいつも評価して下さった．この言葉の真の意味での教育があればこそ私自身いつも研究に希望を持ちえた．また，若い大学院生の成長に常に関心を寄せられていた高須賀義博教授の研究室にいき，そこで論理の甘さを厳しく指摘されたことも，私自身の成長にかけがえのないものであった．また，一橋大学の近くに住んでおられた本間要一郎先生は若い研究者の発言を熱心に聞かれ，大いに激励して預いたことも，忘れられない．また，大学院時代，たまたま私のいた小平市の近くに，大谷禎之介教授がおられ，先生のご迷惑もかえりみず，久留間教授の編集された『マルクス経済学レキシコン』についての質問に行き，いつも親切に答えて下さったことは，私の『資本論』理解を大きく前進させるものとなった．

また，東京経済大学で毎月行なわれていた独占研究会での歯に衣を着せない議論も，私の理論を成長させていく絶好の場であり，独占研の諸氏にあらためて感謝の意を表したい．また，大学院時代，私達院生は自主ゼミナール運動を展開し，富塚良三教授，井村喜代子教授を招いて，恐慌論を学んだことは，一橋大学の若手研究者の成長運動そのものの成長であると同時に，私自身もこの運動の中で成長していった．快く引きうけて頂いた両先生の御指導には今更な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

がら謝意を表したい.

大学院を修了後，北海道大学経済学部に就職し，そこで自立的研究者の道を歩み始めた．若手研究者の学問研究の推進を大いに配慮する北大経済学部の伝統と雰囲気は私の研究にとって絶好の場を提供した．自由な研究条件と学問的刺激を与えて下さった松井安信学部長をはじめ，諸先生方に深く感謝を捧げたい．とりわけ北海道という不慣れな場所で，若い私を激励された，荒又重雄教授，富森虔児教授，森杲教授には感謝にたえない．これらの先生方の学問的生産力の高さには驚くべきものがあり，若い私をその学問的営為そのものによって指導して下さった.

また，本書の作成過程において，大学院で「景気変動論」を開講したが，そこでの若い院生，および助手の皆さんとの討論も，本書の完成の媒介者である．更に，学部でのゼミナールにおいて，『資本論』全3部の読破に参加した学生諸君との苦楽も，本書の作成を越えた私自身の成長の媒介者であった.

また，直接に教えられることはなかったが，私自身の思考様式に決定的に左右したのは，許萬元氏の労作『ヘーゲルにおける現実性の概念把握の論理』（大月書店）である．氏の論稿によってヘーゲル論理学，およびマルクスの弁証法の理解が決定的に前進しえた．とりわけ，反省概念の理解は決定的である．その成果は私の恐慌論の論理展開の全体に適用されている.

また，本書の作成過程において，恐慌論の体系性を獲得する上で，久留間教授の『マルクス経済学レキシコン』（「恐慌」6，7）が大いに参考となった．勿論，『レキシコン』との構成上の相異はある．その構成上の相異は，本書の内容で示しているが，抽象的可能性，発展した可能性，現実性，という恐慌論体系の基本的枠組は久留間教授に学んだ.

次に，「恐慌の現実性」を展開する上で示唆的であったのが，置塩信雄教授の『蓄積論』（筑摩書房）である．教授の強蓄積過程における実質賃金率低下→利潤率上昇の論理展開からは大いに学んだ．私は置塩教授の好況は好利潤であるという発想を，価格変動を導入して競争論的に再構成した.

また，恐慌の現実性と景気循環の両面に「競争」を導入しているが，これは『資本論』において「競争」が「二極分解」されて導入されているとする佐藤金三郎教授の主張に大いに学ばされた．すなわち，体系構成において方法が犠牲にされてはならないという精神は佐藤教授の「両極分解」説から学んだものである．置塩教授の実質賃金率の低下，佐藤教授のいわゆる「両極分解」説，

久留間教授の『レキシコン』の篇別構成等は恐慌論体系構成上の方法的導きの糸となった．とりわけ，許萬元氏の思惟と存在の一致，概念の自己展開，論理と歴史における歴史主義の優位性，これらの主張は私の恐慌論体系を貫く自覚的方法として，一本の赤い糸となっている．

本書の刊行にあたって，私のような若い研究者の著作を出版事情の極めて困難な時期にもかかわらず，快く引き受けて下さった新評論社には感謝に耐えない．とりわけ藤田智隆氏には極めて大きな御迷惑をかけ，御尽力していただいたことには，今更ながら感謝に耐えない．

本書の作成中，私のゼミナールの亀田正人君に清書を手伝ってもらった．亀田君の協力なしにはこの尨大な書きおろし原稿の完成は極めて困難であったことを思うと，あらためて深い感謝を捧げる次第である．

1979年1月

著　者

目　　次

はじめに …… 1

序　章　恐慌論体系化のための基本的視角 …… 11

第1節　恐慌論の上向的展開 …… 11

第2節　恐慌論の歴史的任務 …… 17

第3節　恐慌論の基本構成 …… 25

第1章　恐慌の抽象的可能性 …… 47

第1節　恐慌の抽象的可能性と恐慌の抽象的形態 …… 47

第2節　商品に内在する諸矛盾とその外的表現形態 …… 49

第3節　商品生産の一般的生産関係 …… 59

第4節　商品に内在的な諸矛盾と交換過程 …… 62

第5節　貨幣恐慌の可能性 …… 68

第2章　恐慌の発展した可能性 …… 73

第1節　『資本論』第Ⅱ部と恐慌の発展した可能性の内容諸規定 …… 73

第2節　資本の姿態変換と循環において恐慌の抽象的形態が受けとる内容諸規定 …… 88

(1)貨幣資本の循環と恐慌の発展した可能性の諸規定(88)　(2)生産資本の循環と恐慌の発展した可能性の諸規定(92)　(3)商品資本の循環と恐慌の発展した可能性の内容諸規定(96)　(4)循環過程の三つの姿と恐慌の発展した可能性の諸規定(97)　(5)商品在庫の形成と恐慌の発展した可能性(100)

第3節　資本の回転と恐慌の発展した可能性 …… 103

第4節　社会的総資本の再生産の現実的諸条件と恐慌の発展した可能性 …… 106

(1)社会的総生産物の流通と恐慌の発展した可能性(107)　(2)資本

蓄積の変動と恐慌の発展した可能性(122)　(3)固定資本と社会的総資本の再生産(132)　(4)貨幣資本の運動と社会的総資本の再生産と流通(135)　《補論》生産価格と恐慌の発展した可能性(139)

第3章　恐慌の可能性の現実性への転化……143
——恐慌の原因——

第1節　恐慌の可能性の現実性への転化の能動的根拠……143
(1)資本の一般的規定と資本の自己運動(143)　(2)剰余価値と資本の本性(144)　(3)資本の蓄積と資本の内的本性(147)　(4)生産力発展の資本制的表現形態とその運動形態(152)

第2節　資本の本性と資本制的生産に固有な諸制限……157
(1)資本の過剰生産と商品の過剰生産(157)　(2)資本の過剰生産と商品の過剰生産の相互関係(162)

第3節　恐慌の現実化過程……165
(1)資本の内的本性の現実化(165)　(2)恐慌の発生する条件の成熟(168)　(3)恐慌の動態的契機(169)

第4節　生産の弾力性の発展の基礎上での矛盾を一般化せしめる商業資本と信用制度の役割……171
(1)商業資本の役割(171)　(2)信用制度の役割(172)

第5節　恐慌の根拠……173
(1)生産と消費の矛盾と資本蓄積(173)　(2)生産と消費の矛盾と強蓄積過程(178)　(3)生産と消費の矛盾は恐慌の究極の根拠である(182)

≪補論≫　超過利潤と諸資本の競争……187

第1節　「特別剰余価値」とその問題点……188

第2節　超過利潤の二形態……200

第3節　超過利潤と平均化機構……208

第4節　市場調整価格と超過利潤……214

第5節　市場調整価格と超過利潤の日常的姿態……219

第4章　世界市場と恐慌……225

第1節　国家と国民経済 ……228

第2節　国民経済と国際分業 ……239

(1)国際分業の基本形態——農工分業(240)　(2)工業国間の対立と国際分業(244)　(3)国民経済と国際分業(247)　(4)外に向かっての国家と国際分業(249)

第3節　生産の国際的関係と外国貿易 ……252

(1)国際価値と世界的労働(254)　(2)国際市場価値（＝世界市場価値）と国際的搾取(261)　(3)貨幣の相対的価値の国民的相異(266)

第4節　外国貿易と外国為替機構 ……269

(1)外国為替の基本的意義(269)　(2)資本の運動と外国為替機構(274)　(3)外国為替相場と世界貨幣(278)　(4)外国貿易と信用制度(282)

第5節　金の対外流出と世界市場恐慌 ……288

第5章　景気循環 ……293

第1節　好況・繁栄局面の一般的概説 ……293

第2節　諸資本の競争と信用 ……297

(1)価格変動と諸資本の競争(297)　(2)諸資本の投資競争と信用(300)　(3)株式会社と設備投資及び信用の役割(311)　(4)物価変動と在庫変動(315)　(5)恐慌・不況(322)

第6章　景気循環の対外的側面 ……327

第1節　景気循環の対外的側面 ……327

第2節　金の対外流出と金融引締め ……333

(1)恐慌期における「貨幣の前貸と資本の前貸」(333)　(2)銀行の信用創造と前貸の限度(335)　(3)金本位制度の自動調節機能と中央銀行(337)　(4)恐慌の必然性と人間性(340)

あとがき ……341

凡　　例

① 『資本論』の引用については，青木書店刊，長谷部文雄訳を用い，分冊，ページ数は（『資』Ⅰ，250頁）と略記した．

② 『剰余価値学説史』の引用については，大月書店刊，『マルクス＝エンゲルス全集』第26巻を用い，分冊，ページ数については，（『剰』Ⅱ，560頁）と略記した．

③ 『経済学批判要綱』の引用については，大月書店刊，高木幸二郎監訳を用い，分冊，ページ数は（『要』Ⅰ，305頁）と略記した．

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世界市場恐慌論

序章　恐慌論体系化のための基本的視角

第1節　恐慌論の上向的展開

マルクスが解明せんとした恐慌とは，ほぼ10年毎に周期的に爆発する世界市場恐慌に他ならない．とりわけ，それは19世紀中葉の典型的恐慌現象（この中でも，1847年，1856年，1866年の恐慌）に他ならない．近代ブルジョア社会における典型的恐慌現象は1825年，1837年の恐慌も含めるのが普通であるが，以上の5つの恐慌の中でも，後の3つの恐慌を特に強調しておきたい．すなわち，後の恐慌になればなるほど，世界市場恐慌としての完成した姿態を表出していたからである．この間の恐慌現象がイギリスを中心にして考察された事情については，マルクスの次の如き指摘から明白である．

「近代社会を通じて最近の20年間（1846年～66年）ほど資本制的蓄積の研究に好都合な期間はない．……しかも，すべての国のうちでイギリスが古典的実例を提供する．というのは，イギリスは世界市場で王座を占めており，資本制的生産様式はこの国でだけ充分に発達しており，そして最後に1846年〔穀物法の廃止〕いらいの自由貿易という至福千年王国の開始が俗流経済学の最後の逃げ場を遮断したからである」（『資』Ⅰ，1002頁）．

イギリスにおける資本主義的生産の発展した成果の完成とともに世界市場恐慌もその完成した姿態を示した．かかる恐慌の基本的，かつ一般的に共通な外面的現象は以下の固有な特徴を持つ．

第一に，それは好況，繁栄，恐慌，不況の各局面を継起的に通過する景気循環の一局面としての恐慌であり，約10年毎に生起する周期的恐慌である．

第二に，それはリカード等も認めるような部分的過剰生産恐慌ではなく，あらゆる生産諸部門が参加するところの全面的過剰生産恐慌である．

第三の特徴は，貨幣・信用恐慌をその特殊的な段階，それに固有な不可避的な一過程とすることによって，激発性，暴力性，瞬間性を特有な個性としている点である．

第四に，それは一国的な現象ではなく，主要な工業国を震源地とし，各国が

同時に参加するところの世界市場恐慌として爆発した，という点である．

最後に，恐慌の誰の眼にもつく最も簡単な現象は商品が売れないということである．

1847年恐慌は世界市場恐慌という側面においては未成熟であるが，全ヨーロッパを舞台とした点では，世界市場恐慌としての性質を備えつつあった．以上の諸現象は1856年，1866年恐慌において一層明確になって現われ，その完成した姿態を全世界に示した．

我々が思考の道を通じて理論的に再現しようとする目標としての恐慌は豊かに自己を完成した，以上の如き恐慌である．したがって，我々の分析的端初は具体的総体性において自己を豊かに完成しているこの恐慌現象である．理論の歩みは現実の歩みとは逆行する．過程の発展した成果を待って我々の思惟が始まるのは，そこにおいて最も本質が豊かに形成され，発現するからである．学問的認識が追思考（Nachdenken）を本質とするということは，恐慌の学問的認識においても妥当する．

「人間生活の諸形態に関する追思考は，したがってまた学問的分析なるものは，一般に現実の発展とは反対の道を歩むものである．このような反省は，後から始まり，したがって発展した過程の完成した成果をもってはじまるのである」（同上，177頁）．

ミネルバの梟はせまりくる黄昏とともに初めて飛び立つ．恐慌の学問的認識の対象は具体的総体性において完成している世界市場恐慌であらねばならない．恐慌はそれ自身，多様な諸規定の統一であり，多様な諸規定の総体が恐慌の本質である．マルクスにあっては，恐慌の本質は「ブルジョア的生産過程のあらゆる要素の矛盾が爆発する世界市場の大暴風雨」，「あらゆる矛盾の現実的総括および強力的調整」，としてまず第一義的に把握されており，そのことをいたるところで力説しているのである．

諸矛盾の総括としての恐慌の理論的再現とは，諸矛盾の総合的爆発というその総体性を思惟具体物として再現することに他ならない．多様な諸規定の総括としての恐慌の再現は，最も抽象的，簡単な規定から出発して，一歩一歩具体的な規定を総合しつつ具体的総体性に向かって前進していくことである．その前進の目標であり，前進の統制原理をなすのは，先に恐慌の外面的現象として列挙した諸特質を備えた世界市場恐慌であり，常にこれが主体として表象に浮かんでいなければならない．恐慌の総体性の認識はその理論的歩みの過程を体

系的認識の過程たらしめ，概念的な認識過程たらしめる．恐慌の学問的認識はそれ自体体系的であることを要求する．wissenschaftlich とは，学問的であると同時に体系的であることを意味し，両者は同義である．

恐慌論の体系化は諸矛盾をその有機的連関のうちに編成していかなければならないことを意味するが，かかる諸矛盾の編成原理を与えるものが何であるかが解明されなければならない．だが，それは解明しようとする対象そのものが与えてくれる．我々が解明しようとするのはブルジョア社会における諸矛盾の総合的爆発としての恐慌である．ブルジョア社会を存立せしめ，維持している主体は資本である．恐慌を生み出す主体は資本の運動であり，資本の運動において自己を表現し，実現している矛盾である．この資本に固有な矛盾こそ恐慌を生み出す主体であるから，それの反映として把握される矛盾こそ恐慌論体系の主体である．この体系主体としての矛盾を「基本矛盾」と呼ぶならば，これが体系化の原理，諸矛盾の編成原理を提供するものである．

以上のことから我々の恐慌論体系のための端初，上向的端初の何であるかがわかる．学問的思考は発展過程の完成した成果から出発する結果論的思考であるがゆえに，我々は主体の生み出した成果，産物から考察する．結果から原因へ，現象から本質へ，理論的歩みが進行しなければならない．したがって，端初は直接的な現象であると同時に，それは主体によって生み出され，媒介されたものでなければならない．端初が直接的な存在であるということは，直観と表象によってのみ把握でき，抽象力等の他の何ものをも必要とすることなく獲得でき，単に眼前にあって直接的に拾い上げられた単なる事実・現象である．思惟によって加工を加えられていない具体的な事柄であるとはいえ，どのような事実でもが端初として与えられるわけではない．たとえ抽象的なものでもそれが無媒介的に与えられるならば，それは混沌としたものであり，直接的な存在の域を出ない．端初となる直接的現象が同時に主体によって媒介されたものであるということは，この事実を分析すれば，必然的に主体に行きつくことが可能であるような端初が選ばれなければならない，ということを意味する．

以上の点は下向法における現象や事実の分析と同じ分析とはいえ上向法における分析との相異を示す．下向法の端初は全体の漠然たる諸現象の集合体に他ならない．上向法の端初は下向法によって得られた対象の概念を基礎として，この概念に到達することが可能であるような事実である．すなわち，概念にふさわしい事実が選ばれるのである．主体は端初を生み，運動させる主体である．

恐慌論体系の体系主体の何であるかを示すことは，この産物から考察し，それを生み出した主体に向かって，それを運動せしめる根拠に向かって進んでいくことを意味する．前進は同時に原因，根拠に向かっての根源的深化の過程に他ならない．このことは『資本論』において，体系主体としての資本の産物としての商品の分析から出発し，資本に向かって前進し，それ自身に根拠を措定していく上向法と何ら変るところはない．

以上から，恐慌論体系の学問的端初の何であるかがわかる．恐慌の直接的現象として誰の眼にも明白な圧倒的な事実は，商品が売れない，ということにつきる．恐慌論の端初はブルジョア社会の表層において現われている商品流通そのものによって与えられているのである．我々はこの商品の実現不能という表面的・直接的現象を生み出す根源的動因をその深層の内に求めていかなければならない．それを発見していくことが上向の過程である．

かかる上向法としての思考は反省的思考である．商品が売れないがゆえに恐慌が生じるかに見える．だが，これは仮象に他ならない．このことを理解しようとすれば，ヘーゲルの反省概念が極めて役立つ．

「仮象は反省と同一のものである．しかし，仮象は直接的な反省としての反省である．そこで，この自己の中に復帰したところの反省したがって直接性を離脱したところの仮象に対して，われわれは外国語の反省（reflexion）という言葉を使う」（ヘーゲル『大論理学』武市訳，岩波書店，中巻，17頁）．

英語で，reflexion といえば，反射，反射光という語義が辞書に登場する．仮象とは直接的な反省であるとするヘーゲルの指摘はこの reflexion の意味から理解できる．反射光は直接的には鏡から発しているかの如くに見える．だが，それはそれ自身の光源を持っており，反射光は光源を原因，根拠とし，それに媒介されている．我々が反省的に思考しなければならないのは，現実がまさに反省関係にあるからである．商品が売れないということが反射光であるならば，我々はその光源である「基本矛盾」に向かって前進しなければならず，ついで光源は鏡に向かって照射し，鏡から光の発することを示さなければならない．基本矛盾にいたれば，それを根拠として商品が売れないということを再現しなければならない．

それでは，上向の段階的歩みはいかように踏み固めてゆけばよいであろうか．端初が直接性と媒介性の統一にあるということは，論理の進展もこの二重性によって規定されるということを意味する．商品が売れないということは眼前に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com